帝京科学大学紀要 Vol.13（2017）pp.281-283

いのちをまなぶキャンパスにて
―いのちの始まりといのちの終わりにかかわる教育―

医療福祉学科　設置準備室アドバイザー　福沢節子

児童教育学科　非常勤講師

In My Cumpus for Study of Life

Setsuko FUKUZAWA

１　はじめに

このエッセイを書きたいと思ったきっかけのことから始めたい。

私は、「いのちをまなぶキャンパス」という言葉が好きである。この言葉は、簡潔であり、なかなかインパクトが強くまた奥深い。いのちとは？　まなぶとは？　そこに想いを寄せると際限なく不可思議なものである。そして、現にいのちの営みは続いていく。

本学は、いのちの学び方としてのさまざまな領域とコースを持っている。その中で、私は非常勤講師として児童教育学科と看護学科で教育にかかわり、医療福祉学科の設置準備にもかかわってきた。幸いにして、教育活動を通して「いのちをまなんだ」と感じられる場面に出会うことが出来た。本稿では、その体験の中から場面をとらえ直し、私の考えを述べてみたい。論点は、看護師として10年の実務経験のあと、看護教育、介護福祉教育、保育教育、介護の教員や実習指導者を育成してきた立場から展開してみたい。

２　昨年度の「子どもの保健Ⅱ」の授業から

昨年度2015年12月の児童教育学科の「子どもの保健Ⅱ」の授業の時の体験である。

かけがえのない子どものいのちが無残に失われることが起こりうる。それは、事故によって、思いもかけない出来事によってである。そのような事例を恐怖の思いで語った。そして、子どもの事故を未然に防ぐ保育士の役割と知識や心配りについて語っていた時、教室の空気は変化し、シーンと静まり、またピーンと緊迫した。学生と私は一体化した。まさに「生命の畏敬」に打たれた瞬間であったと感じられた。

このような空気感は、長い間教師をしていても何年かに一度しか経験できないことである。この時、いのちをまなぶキャンパスでいのちを語ることのありがたさと畏れ多さを感じて、震えてしまったのであった。うまくタイミングを設定して真摯に示唆を与えれば、学生は感じ取って返してくれるのである。このことを確認した出来事であった。

３　今年度の「子どもの保健Ⅰ・Ⅱ」の授業から

（１）授業の計画と実施

今年度は、私も含めて４名の講師による「子どもの保健Ⅰ」（60時間）を前期に終了し、後期から上記と同科目「子どもの保健Ⅱ」（30時間）の授業に入った。初回の９月22日､「いのちの音」として「心音」の聴取を演習した。

演習のねらいは、①いのちの音を聴き取る、②いのちを感じる、③いのちの営みと限界について感じる、と提示した。加えて、心臓は母のおなかの中にいる時（胎生期）から始まるポンプ作用を、一刻の休みもなく生命が尽きる（心臓死）まで続けることを強調した。

保育士資格取得には、心音聴取は必須の技術項目ではない。そのため、授業では保健の動機付けのため、いのちを感じる具体的な教育方法のひとつとして取り上げたのである。

（２）授業の実施結果と学生の反応

心音の聴取にあたって、説明しながら聴診器を用いてデモンストレーションして、その後全員が実施した。自分とクラスメイトの心臓の部位をシャツの上から聴診器を当てて音を聴き取った。演習後、振り返りとして、15分程で記述し、感想文を提出させた。学生たちにとって、この演習は新鮮な体験であったようで、記述された学生たちの文章は、２クラスとも、提示した講師の私も驚くほどの濃い内容

であった。

「感動した」「友達と違う音」「心臓は不思議で偉大」「当たり前のことだけど人はそれぞれ生きていることを改めて感じた」「死んでしまった人は鼓動が本当に聴こえないのかな？と思った」「いのちの大切さが解ったので、大切に生きなければいけないと改めて思った」「保育士はいのちを守っているのだ」「医師はすごい。この音を聴いてそれで診断するのだから」など、感受性の豊かな表現であった。以下、４名の感想文を、原文のまま部分的に取り上げて紹介したい。ここに取り上げるにあたっては、授業内で、本論に使用することを説明し了解を得て倫理的配慮をした。

Ａさんの感想文：心音を聴いてみて、ドクンドクンとリズムの良い音がした。ずっと聴いていたら落ち着いて眠くなりそうだなと思った。きっと、おなかのなかにいる赤ちゃんは、お母さんの心音を聴いて安心しているのだろうと思った。

Ｂさんの感想文：私は今日初めて自分の心音を聴いてみて思ったよりもゆっくりやさしい音で意外だった。先生がおっしゃっていたとおり、友達と自分の音は違っていて不思議だった。スポーツや病気が心音にどのように影響するのかも調べたいと思った。新生児、子ども、大人、高齢者など世代によっての違いにも興味がある。

Ｃさんの感想文：心臓の音は、とても力強い音で、このドクンという動きで命の営みが続いていくことにすごく人類の不思議に触れることが出来ました。心拍数も笑った時は早くなっていたり、変化していて、心臓が一生懸命に頑張っているからだと考えました。死ぬ時はこの心臓の音が、だんだんと弱くなり、最期に動かなくなると思うととても怖いと思いました。

Ｄさんの感想文：今日ははじめて心音を聴きました。自分の命を感じることができ、今回の授業を受けて良かったと思いました。将来、保育者になったら、子どものいのちを預かっているということを忘れずに、いのちを守り、保育しなければならないと思いました。

（３）いのちの始まりにかかわる授業について私が想うこと

このような体験を通して、保育者としていのちへの責任感が強くなって欲しいと期待する。子ども本人の死、家族の死、子どもなりの「死の概念」作りなどにも向き合うのである。人は死なないと思っている子、もしくは、生き返ると思っている子もいるのである。子どもの頃から、人の死について考えられる子どもに育てたいものである。そもそも、いのちについて考える授業は、教育する者がまず強く意図しておかないと的確にはできにくいのである。死が日常生活から遠ざけられている現代の社会では、ますます難しいことなのかも知れない。

しかし、授業はいつもうまくできて達成感があって、感動するというわけにはいかない。ときに、学生が授業に集中しなかったり、学生の思いがけない反応に意気消沈してしまうこともある。まさに授業は生き物である。また、世代間のギャップは大きく、40年以上の歳の差は如何ともし難い。しかし私は、歳を経たことを嘆いているわけではない。私自身の長い人生経験と、社会的常識に基づいて、うるさく「しつけ」をしている。学生のほうが私に適応するのに戸惑うことが多いであろうと、逆に心配しているところである。だが、ここは譲れないのである。保育士は、子どもの個性を尊重し、同時に社会性を身につけさせていく職業であるから。何より、子どものいのちを守る職業であるから。「しつけ」といっても、教室内で迷惑にならないというだけの初歩的なことであるが……。

４　看護学科の教育にかかわって

（１）地域看護学実習の担当教員として

また一方、いのちの終わりにかかわる教育について述べてみたい。

私は、去る９月下旬（2016年）に看護学科の「地域看護学実習」で担当教員として教育活動をする機会に恵まれた。昨年度に引き続きの職務である。地域包括支援センターで実習する学生の３つのグループを担当した。

本学看護学科の「地域看護学実習」の「実習要項」は、使いやすく整えられ、具体的に行動レベルまで示されている。この「実習要項」を活用して、学内オリエンテーションがなされ、学生は手順を踏んで１週間の実習に入った。実習目的を踏まえ（紙面の都合で省略する）、実習目標は、①地域看護活動の対象の理解、②地域における看護の役割・機能の理解、と設定されている。学内２日、地域包括支援センター３日、産業看護または障害者施設１日である。ちなみに「在宅看護学実習」については、別に設定されている。

（２）実習から、いのちの終わりにかかわる教育について私が想うこと

学生は、認知症であってもその人らしく地域で人

生を終えていくための支援について驚きと感動を持って実習していた。職員の熱意は、住民の自主性を尊重して、傾聴の姿勢をくずすことなく、足立区の下町のおせっかいな気風を尊重していた。「独居高齢者は多いが孤独死は無い」との説明を受け、講義やテキストと違った地域での学びをしていた。

「地域包括支援センター」の現場では、電話がひっきりなしにかかっている。その対応の優しい口調と、「そうでしたか」など言葉少なに相槌を打ちながら根気よく聴いている姿から、学生も私も学ばせていただき、力を得た。「大丈夫だ。地域は生きている」と確信できる現場に私も居たのであった。学生の看護観は、病院から地域へも拡がり、大きく変化した。現地での保健師・看護師・社会福祉士など指導者を交えてのカンファレンス、学内まとめのグループ発表など、すべて緊張の中にも学習効果が高く、学生にとっては新鮮であったようだ。

また、「認知症カフェ」として、「せんじゅカフェ」が千住キャンパス３号館１階で１ヵ月に１回開かれている。「足立区地域包括支援センター千住本町」と本学の共催である。私は、残念ながらまだ参加していないが、２年目に入り、看護学科と医療福祉学科との協力体制で運営されている。是非、参加して認知症のあるなしにかかわらず、お互いにエネルギーを分かち合いたいものである。

現代の地域のケアは、ボランティアや自主的な住民の組織と連携して、専門職が支える時代である。認知症のある方々も含めて、地域でのターミナルケア、地域での「看取り」が今後の社会の大きな課題である。今やもう、福祉施設がすぐに救急車を呼ぶ時代ではないのである。福祉職が中心となり、医師・看護師ら医療職がフォローアップして、人生最期を支援する必要がある。

５　いのちに心を寄せて

いのちとは、自分のものであるようで自分のものではなく、かけがえのないたった一つのものである。見ることは叶わないが、確かに存在し、必ず終わりを迎える、という真実を有している。そして、最高の価値を有している。その根本的なことを授業として強制的ともいえる方法でおこなっている。なぜ強制かといえば、保育士が業務をとおして行う子どもへの死の教育や死生観の形成のために必要な、いのちについて考えるということが、自主的には難しいからである。

また、現代の大学生は死生観が希薄であるともいわれる。確かに、若い学生には、「死」を考えるのはいやなことかもしれない。学生たちは人間は死なないと思っているわけではないだろうが、いのちの終わりなど考えたこともないのが現実の姿であろう。しかし、保育や看護をめざしている学生には、いのちをあずかっているという自覚は必要であり、いのちはいつ失われるかわからないものであるという認識をもってもらいたい。したがって、いのちの不思議さや命の大切さとともに、その尊厳についても教育したいところである。

６　医療福祉学科への期待

折しも、本学には医療福祉学科が設置され、本年度から１年生が入学してきた。ますます、医療保健福祉の多職種連携のもとに、いのちの始まりからいのちの終わりまでのケアとその教育が発展していくことを願っている。言い換えると、教育によって人の痛みが解るように成長し、なおかつ、リーダーシップを兼ね備えた人材を社会に送り出していくことを願っているのである。

７　終わりに

私は、教室に居て貴重なひとコマひとコマを丁寧に、また心を熱くして教育活動をしていきたいと思っている。しかしまた、このように偉そうなことを書き並べているととても気恥ずかしい思いがする。私自身、現在は「自分の老い」を実感として受け入れている。しかし最近まで、医療の現場や教育の現場にいながら、死は他者のものであり、自分の死とはとらえていなかったのである。振り返れば身近なものでなかった。「太陽と死は直視できない」といわれるが、そのとおりで、死や老いも含めて、避けたい気持ちになりやすい、辛いことなのであろう。私は、いま少し、いのちをまなぶキャンパスにあって教育に携わり、少子高齢社会、多死社会を迎える困難なこの時に、学生とともに私もいのちをまなび続けたいと考えているのである。